

地ひびき



为 320号

一冊の本「君たちはどう生きるか」

丸岡 稔

地ひびきの先輩でもある、今年96才になった私の姉（竹内ミヨ）は、女学校時代から本の虫で、それを弟たちに話して聞かせるのが好きでした。「アングル・トムの小屋」など、姉のふとんに潜りこんで聞いた、ミシシッピ川の氷の上を渡って逃げる場面など、今でも声の抑揚とともにはっきり憶えています。長岡市の女子師範学校に入ってから、休みで帰省する度に私に本を土産に買って来てくれました。きつと小遣いを節約して買ってくれたものと思います。

そんな中で、私が生涯影響を受けた本の一冊が、表題の「君たちはどう生きるか」です。あれから70数年後の今、その本がブームになっていることに驚き、又さもありなんと嬉しくて早速本屋に飛んで行きました。懐かしい、熱いそして重い本で、これを初めて読んだのはつい昨日のことのように思われました。発刊が昭和12年ですから、日支事変の始まった年で、私の長兄が応召されて戦地に行っています。そして私がこの本を買ったのは旧制中学に入った昭和16年、長兄に代って次兄が応召され、この年に第2次大戦が始まっています。この本の主人公はコペル君。私と同じ中学生で、お父さんが亡くなり、叔父さんが後見人の形で関わって行きます。ある時2人でデパートの屋上から下を眺めている時、動いている人や車を見

ていて「人間ってまるで一つの分子のようなものだね」とつぶやいたのを、コペルニクスが天動説から地動説を説いたようなものだ、叔父さんがその発想を賞めてコペル君と呼ぶようになったのでした。母一人子一人の生活ながら、素直にのびのびと育っている一人の少年のことです。「あぶらげ」という^{あだな}紳名でいじめに会う小さい豆腐屋の子U、それを助けるK、家の手伝いで学校を休まなければならぬUの家を訪ね、ノートを貸してやるコペル君。生意気だと上級生から制裁を受けるKの前に立ちはだかるUやM、自分も行かなければならないのに足がすくんでしまうコペル君が陥る自己嫌悪。そんな出来事の中で育って行く友情。コペル君の悩みに言葉や手紙で導いて行く叔父さん。ナポレオンのエピソードを語り英雄的精神を説くMの姉さん。それに感動したコペル君に、叔父さんは「英雄でも偉人でも本当に尊敬できるのは人類の進歩に役立った人だけだ」と言って聞かせます。日本のあの時代に、このような本が出版されたことは今考えると驚異ですが、この本に感動したのは私だけではなかったことは後で知ることとなりました。

昭和30年代、北海道夕張市の炭鉱病院に勤務中、生涯の友となる2人に出会いました。その1人Kさんは、大学卒業は私よりも1年おくらせていますが、年令は2才上で、陸軍士官学校で終戦を迎え、その後北大の医学部に入っています。デリケートな神経を持ちながら外見は豪放で、誰からも好かれていました。その後少しおくらせて来たOさんは優秀な外科医で、大変な勉強家でしたが、医学以外にも幅広い知識を持っていて、酒は一滴も飲めなかったのですが、わ

れわれのそんな会にもつき合ってくれました。この2人と私は独身寮で隣り同志の部屋でしたが、生まれや育ちは勿論、性格も違う2人から私は大きな影響を受けることになるのでした。ある日少年時代に読んだ本の話になった時、偶然にもこの2人が「君たちはどう生きるか」を愛読していたことを知り、共にコペル君の同級生のような感覚になったことを憶えています。一番年若い私が結婚のため寮を去り、間もなくOさんが重い肝臓病になって一旦東京に帰ったのですが、それから間もなく寮が全焼する火事がありました。KさんはOさんの沢山の原書を含む学術書を持ち出すのがやっとで自分のものは全部焼けてしまいました。Kさんは「おれのなんか焼けてしまった方がいいものばかりなんだ」と笑っていました。

数ヶ月後、Oさんが元気になって帰ってきて一緒に仕事が出来るようにりましたが、やがてKさんもOさんも結婚することになり、すでに石炭産業に陰りが見えた夕張を去り、3人夫々の道を歩むことになったのです。言わば一冊の本により友情が深まった感のあるかけがえのない友は、この10年の間に相次いで亡くなってしまいました。今こうして懐かしい本を手にして、この90年自分はどう生きて来たか、そしてKさんは、Oさんはと思いを馳せるのですが、同時に人の縁の不思議さを痛感しています。

売れているというこの本は、今どんな人に多く読まれているのでしょうか。多感な中学生や高校生が読んでくれるれば良いのだがと祈るような気持ちで希っています。